

岡山藩主池田家旧蔵資料の包括的研究（要約）

浅利 尚民

序章「近世大名家旧蔵資料の包括的な研究に向けて—岡山藩主池田家を例にして—」では、明治維新後に旧大名家所蔵の文化財がどのように集積され、そして散逸していったのかを概観した。そのうえで岡山藩主池田家の家政機関による文化財（什器・記録・図書類）の管理体制と構造、個別資料の研究、展示公開という、包括的な研究を行うことを目的とすることを論じた。

第一章「岡山藩主池田家旧蔵資料の管理と構造」では、近代の池田家政機関が業務を行う際に書き記した家政関係資料を読み解き、池田家内部でどのように資料群を分類し、管理していたのかを論じた。第一節「『禁裏拝領銅花生』に関する考察—近代金工作品伝来の一事例として—」では林原美術館所蔵「禁裏御拝領銅御花生」に考察を加え、第9代岡山藩主池田茂政が『徳川礼典録』を編纂し、明治天皇に献上した功績によって、明治15年（1882）1月27日に明治天皇から拝領した作品であることを論じた。さらに池田家には近代に家政機関が作成した複数の道具帳が現存していることを指摘し、それらの精査を行うことの重要性を論じた。第二節「旧岡山藩関係資料・調度品の近代における変遷とその復元—「諸什器取調表」を手がかりとして—」および第三節「旧岡山藩主池田家の近代における文化財管理の実態について」では、第一節で明らかになった家政機関の調度方による什器管理体制や、記録方によって記録（藩政資料）・図書類が管理されていたことを明らかにし、その全体像を考察した。そして大正時代に行われた池田家の什器の売立に際しては、由緒あるものや歴史上重要な資料などは売立の対象から外されていたことを指摘した。さらに昭和25年（1950）に、池田家旧蔵品のうち記録方が管理していた藩政資料と図書類が岡山大学附属図書館へ移譲され、翌26年（1951）に調度方が管理していた什器が林原一郎氏（1908～1961）に移譲されたことを論じた。

第四節「池田家歴代肖像画と池田継政」では、大正時代の売立に際し由緒あるものとして対象にならなかった資料のうち、第三代岡山藩主池田継政が制作に関与した池田家歴代肖像画を論じた。継政は多くの祖先の肖像画の制作に関与するだけでなく、傷んだものには修補を施すなど保存活動にも意をはらっていた。祖父で藩祖でもある池田光政の肖像画を何度も制作しており、現在伝わる光政の面貌は、継政の夢に現れた姿を描いたものであることも判明した。また、これらの肖像画の多くが、岡山城内で祖先を祀るための施設である祖廟で管理されていたことも明らかになった。

第五節「池田継政の画業と交際」では、同じく継政が好んだ絵画の制作についてとりあげ、その歴史的な意義や背景を論じた。継政は若い頃から絵画を好んで制作し、画題も源氏物語などの物語、歌仙絵、能楽、孔子像など多岐にわたっていた。そして自らが描いた絵画や、自家の什器として伝わる絵画などを、将軍を隠居した徳川吉宗の上覧に供してい

たことも判明した。継政にとって絵画とは、自ら描くものであり、鑑賞するものであり、吉宗との交流をとりもつ重要な道具でもあった。加えて大名家では、藩主自筆の書画は自家の宝物として管理されており、書家や職業絵師のものとは扱いが異なっていたことを論じた。

第二章「歴史学・美術史学からみた岡山藩主池田家旧蔵資料」では、第一章で明らかになった池田家の文化財の保管体制の構造を基礎とし、個別の資料の歴史的・美術的な意義を論じた。第一節「市浦毅斎述作『芳烈祠堂記』について」では、閑谷学校の創設を論じる際の基本史料とされる『芳烈祠堂記』について、林原美術館所蔵本の考察を行った。その結果、林原本は近世には岡山藩学校で管理され、近代以降は池田家の所蔵となったもので、原本にもっとも近い史料と考えられることが明らかになった。第二節「池田光政筆『池田忠雄追悼歌』について」では、実質的な初代岡山藩主池田光政の叔父忠雄が、寛永9年（1632）4月3日に没した後、光政が鳥取から岡山へ入城する直前の7月25日に、神原（現在の西宮市）で亡き忠雄を想い詠んだ自筆の和歌の内容や伝来状況を論じた。その結果、叔父忠雄を「父」と思うほど慕っていた光政の心情や、明治25年に池田家が購入した資料であることが明らかになった。第三節「閑谷神社旧蔵『池田輝政・利隆・光政画像』について」では、明治16年に池田家一族によって閑谷神社へ奉納された「池田輝政・利隆・光政画像」が、岡山藩旧臣で池田一族の池田信充が中心となり、秋山胤彦によって描かれたものであることを明らかにした。さらにこれらの画像が描かれる際に参考にした先行画像を紹介し、近世から近代にかけて池田家に伝来した肖像画の像主の向きが、制作者の意図と組み合わせにより変化したことを論じた。第四節「『黄葉亭記』の原本と写本—岡山藩主池田家旧蔵資料の構造分析を踏まえて—」では、江戸時代後期の閑谷学校の様子を伝える複数の「黄葉亭記」について、原本を確定する作業を試みた。その結果、林原甲本は第9代岡山藩主池田茂政が愛蔵していたものであり、林原乙本はその写本、現在は重要文化財に指定されている閑谷甲本は林原乙本の写しであることを論じた。

第五節「『池田光政画像』の古写真にみる表装裂について」では、現在は所在不明となっている池田継政が制作した「池田光政画像」の古写真を紹介した。池田家旧蔵資料の書画類の中には藩主が制作に関与しているものが多く、それらの表装裂や裂の取り合わせには、藩主自身の意思や好みが反映されていることを論じた。第六節「『池田光政所用品』の伝来と現状について」では、池田光政が身につけていたり使用していた一群の資料である「池田光政所用品」について、明治・大正・昭和の各時代で、どのように管理されてきたのかを、各時代に記された道具帳や書籍などから明らかにしていった。そしてこれらの資料が現在所蔵されている林原美術館での管理状況を紹介し、用途などを踏まえた現在の分類方法が、過去に池田家で行っていた整理作業と同一線上に位置づけられることを確認し、「池田光政所用品」が、現在の博物館施設にどのように継承されてきたのかを示す貴重な事例であることを論じた。

第三章「大名家資料の変遷と展示—岡山藩主池田家コレクションを中心に—」では、筆

者が林原美術館で近年開催した池田家資料の企画展四件について、その趣旨やテーマ設定の理由、資料の展示方法などについて博物館展示論の立場から具体的に論じた。第一節「戦国期から近世における池田家コレクションの形成と発展」では、戦国期から近世における池田家コレクションがどのように形成され発展していくのかを、主に池田恒興・輝政・利隆といった歴代当主の活躍を示す古文書や肖像画、そしてゆかりの品々の展示方法について論じた。第二節「池田家コレクションの核になった人物と文化財」では、初代岡山藩主の池田光政が制作した系図や自筆の古典籍や歌書、そして娘のために制作した婚礼調度などから、江戸時代初期の明君と呼ばれ、後世に大きな影響を与えた光政の実像について展示を通じて論じた。第三節「池田家における絵画コレクションの形成」では、第三代藩主の池田継政の制作した肖像画や絵画などから、祖先や肉親への敬慕の念が篤く、熱心に肖像画や絵画を制作することで、池田家の絵画コレクションを築きあげた継政の姿を展示を通して明らかにした。第四節「近世から近代へいたる大名家資料の最盛期と拡散」では、幕末から明治期にかけての岡山藩や藩主の活躍と、近世から近代へいたる大名家資料の最盛期とその後の拡散について、明治維新後の池田家家政機関による管理方法や同家がおこなった売立の基準を示す資料の展示を通じて論じた。

終章では、第一章から第三章までを総括したうえで、大名家旧蔵資料は主に什器と記録・図書から成り立っており、一見するとそれぞれが独立しているように見えるが、研究にあたっては、まずは膨大な資料群の全体の構造を明らかにし、それぞれの資料群のもつ性質を理解したうえで行っていくことが重要であることを論じた。そして各資料群に属する個別の資料については、それぞれの資料群の性質を前提とし、歴史学的、美術史的な検討を加えていくことが重要であり、それらの意義や魅力を伝えるための展示方法についても実例を通して論じることで、大名家旧蔵資料を研究するための方法論を明らかにすることができた。